紛争後社会における生活再建の動態に関する予備調査

—南スーダン共和国西エクアトリア州の事例—

平成 25 年入学
派遣先国：南スーダン共和国
山崎　暢子

キーワード：平和構築，国家と社会，暴力，ムンドゥリ，モル

対象とする問題の概要

冷戦終焉以降に頻発した地域紛争について，紛争へ積極的ないし消極的に介入する国際社会からの影響を念頭におきつつ分析を進める必要があること，また，平和構築や国家建設とのかかわりを重視することが指摘されてきた。紛争が発生する要因についていえば，民族や宗教の対立、貧困や低開発，そして統治体制の問題にすべてを求めるのではなく，地域の歴史的背景を理解し，社会，政治経済など複雑に絡み合う動的な関係を慎重に分析することが重要である。他方，平和構築に関しては，欧米起源の枠組みありきではなく，地域に蓄積されてきた知識や制度を活用した秩序再建のあり方が要請されるようになっている。こうした平和構築などの試行錯誤が繰り返されている地域のひとつが，2011 年 7 月にスーダン共和国から分離するかたちで独立した南スーダン共和国である。本研究では，同国の武力紛争がもたらした影響と生活再建の動態を主要な調査対象とする。

研究の目的

現地語の習得に努め，人びとの現在の生活の様子や社会関係をひろく把握することが，今回の予備調査の目的であった。本研究では，南スーダン西南部の西エクアトリア州に焦点をあてる。スーダン（現、南スーダンを含む）におけるおもな武力紛争として，（スーダン共和国の）独立前年に始まる第一次内戦，1983 年から 2005 年まで戦われた第二次内戦や，そして 2000 年代に深刻化した西部ダルフールでの「ジェノサイド」が世界の耳目を集めてきた。西エクアトリア州は，第二次内戦でスーダン人民解放軍（SPLA）が勢力をのばしたものの，激戦区となり多くの人びとが国内外へ避難を強いられた東部の州とは異なる歴史的変遷をたどってきた。この地域では，アザンデなどを例外として，諸民族内，あるいは民族間関係についてなされた研究はごくわずかであり，新たな研究が必要とされている。

フィールドワークから得られた知見について

当初は 2013 年 12 月 3 日から翌年 2 月 14 日までの調査を予定していたが，12 月 15 日より首都のジュバで銃撃，爆撃が発生したことを受けて早期に帰国した。短期間の滞在ではあったが以下にその概要を述べる。

12 月 6 日から 8 日に，首都で開催された国際フォーラム“Peacebuilding and ‘African Potentials’: Harmonizing Approaches from Above and Below in South Sudan and Beyond”（主催は科学研究費基盤研究(S)

「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」研究代表者：太田至）に参加し，国連関係者，援助団体関係者，研究者などそれぞれの見地に立った，（南）スーダン又はその周辺地域での紛争をめぐる分析や活動報告を聴いた。

フォーラム後，まずジュバから北西に 180 ㎞の（車で 6 時間程を要する）ところに位置するムンドゥリと呼ばれる地域を訪れた。ここには，中央スーダン語系のモルという人びとがおもに暮らす。ムンドゥリでは，市場を見て回り，本屋でモル語辞書と語学教科書数冊，民族誌を購入するとともに，紛争後社会において和解や教育などの分野で活動する地元 NGO の職員から話を伺い，当該 NGO の発行する機関誌を譲り受けた。次に，ムンドゥリから東へ約 30 ㎞離れたルイと呼ばれる地域を訪問した。ここでは，アラブ商人によって交易のため多くの住民が奴隷として連れて行かれた場所に今も残るという大木があり，その木陰で，NGO 職員らの説明にしばらく耳を傾けた。1885 年にはマフディー勢力，1898 年に英国＝エジプトによる統治に取り込まれ，人びとは離散したものの，情勢が安定すると故地にまた戻ってきた。頻繁な人の往来はときに国境をも越えておこなわれてきたという。歴史資料の閲覧許可を教会から頂き，後日改めて訪問する約束をしてルイをあとにした。ジュバ国立大学のワッサラ教授より発行して頂いた調査許可書を受け取るために一時ジュバへ戻ったところで情勢が悪化し，帰国を余儀なくされた。

今後の展開・反省点

調査地のおおよその選定ができたことは成果であった。しかし緊急事態の発生によって，特定の世帯に住み込んで聞き取り調査や参与観察を行えなかったことは，とても残念である。

今回の武力紛争では，エチオピアやケニア，ウガンダなど近隣諸国から出稼ぎに来ていた人びとの商店が軒を連ねる地区も攻撃の対象となり，被害は全国的に拡大した。2013 年末から 2014 年初めにかけて政治会談がもたれたことで，事態はとりあえず収束に向かっているようだが，現地の状況は予断を許さず再入国の目途が立たない。今後しばらくは，近隣諸国での難民調査などをおこなうことなども考えている。

写真１．ウガンダのビクトリア湖から流れ出る白ナイル。エチオピアから発した青ナイルや複数の支流と合流し、その賜物といわれたエジプトの地を貫いて地中海にそそぐ。写真奥に見えるのはウガンダへ通じる通称「ジュバブリッジ」で，今回の暴動時には一時封鎖された。
写真２．ジュバ市内にあるモスク
写真３．ムンドゥリのレストランでの食事

写真１．

写真２．

写真３．